

研究所第 14 回フォーラム 「オリンピック・パラリンピックは障害のある人のスポーツ 参加に寄与するのか」

澤江 幸則 (筑波大学)

よろしくお願いいたします。澤江と申します。高橋先生からご紹介いただきましたが、臨床発達心理士の資格を持ち、どちらかというと、オリンピック・パラリンピック関係の話よりは、不器用さのある子どもや発達障害のあるお子さんの運動発達などを中心に研究や実践を行っています。

高橋先生からご紹介いただいたように、東日本大震災のときの取り組みというのは、障害のある子どもではないのですが、本人が震災を受けて、そして、見知らぬ土地に来て、大人たちは明日、どうしようかと思っているときに、子どもたちがすごく萎縮している様子をみました。そうした萎縮している状況を僕たちで何とかして、心を解放させてあげようと思い、体も心も汗をかこうというテーマで、高橋先生たちと一緒に、いろいろな活動をしました。

そのときに使わせてもらった方法がアダプテッドです。僕らの研究領域はアダプテッド体育・スポーツ学という名前なのですが、もともとは障害のある人たちに合わせて体育・スポーツをつくりましょうと、体育・スポーツについて考えましょうというのがはじまりでした。そこから派生をして、「その人に合わせる」という言葉でアダプテッドという表現を使うようになりました。つまり、震災を受けている子どもたちが体と心の汗をかこう、だけれども、実際、遊ぶ場所というのが非常に限られた空間の中で、どうしたら汗をかけるのだろうか、そうした状況に合わせて、いろいろな活動を考えてきました。

その一方で、東京オリンピック・パラリンピックの誘致が決まったのが数年前です。そのときに、いろいろな情報が社会に発信されました。その情報が発信されたときに、意外に間違っている情報も多かったのです。それも間違った情報があたかも真実であるかのようにいろいろなところで発信されているのを見て、ちょっとこれはまずいのではないかなと思いました。

僕は筑波大学の体育の出身なのですが、在学中に指導を受けていた先生が、1964年の東京オリンピック・パラリンピックのときの、パラリンピックの指導者だったのです。その方から聞いた話と、今、社会に出ている話は少し違うなと思ったのですね。

そこで、もう一度勉強し直し、僕から発信をし直そうということから、いろいろなところでパラリンピックの話をさせてもらうようになりました。自分の言っていることが絶対間違っていないとは、言い切れないですけども、おそらく、一番、真実に近いのではないかと思います。

きょうもそれに関連するような話をさせてもらいます。意外に知られていないパラリンピックというのがあります。ぜひ、一緒に考えていただきながら、今度、パラリンピックや障害者スポーツを見るときに、ああ、そういうことか、ああいうことかというように見ていただければと思います。

さてオリンピック・パラリンピックは本当に障害がある人のスポーツ参加に寄与するのかという、タイトルをつくらせてもらったのは、地域の小学生、中学生、高校生または僕たちが、障害のある人たちのスポーツ大会であるパラリンピックを見て、結局、オリンピックや今開催されている世界陸上も一緒ですが、これらを見て、明日から運動しようかと思う人がどのぐらいいるかなと思ったからです。ある意味、ここはモチベーションの世界です。

実は、障害のある人たちに地域の中に出てきてもらいたいという思いからパラリンピックは開催されています。それにもかかわらず、本当に障害のある人たちが町に出てくるようになったのか。さらに言うと、障害のある人たちがもっとスポーツに親しめるようになったのか。そのような意義があって、パラリンピックは開催されています。

実際、本当にそうなのということを国内で誰も検証していなかったのも、よし、やろうと思い調査しました。そういう意味では、障害のある人たちがどうモチベーションを持っていけるのか。テーマには、オリンピック・パラリンピックと書いてありますが、ほとんどパラリンピックの話です。しかし実は、オリンピックも障害のある人のスポーツ参加にかなり関係しているということが、私たちの研究結果に出てきます。それについては最後に時間があったらお話しします。

パラリンピック 障害のある人のためのスポーツの祭典

ロンドンのパラリンピックのときに作られたプロモーションビデオがあるので機会があれば見てみてください。 <https://youtu.be/6RMOSDynkw8>
これがパラリンピックという世界です。

実際に見られた方もいらっしゃると思いますし、初めて見た方の中には、こんなに激しくやっているのかと感じた方もいたと思います。

筑波大学の中にスポーツ科学を専門にしている先生たちもたくさんいます。その先生たちと一緒に、障害のある人となない人で一緒にスポーツイベントをやりますということになったのです。

そのイベントに、車いすのランナーと一緒に参加することになったときに、ある先生から、車いすの人がいたらタイムが遅くなるのではないかと言われたのです。それで、ビデオを見てもらったのですが、そのときにこんなに速いのかと驚かれました。

むしろ、マラソンのときにも車いすのランナーを先にスタートさせます。そうでないと、後ろから車いすのランナーが来たら追突されますから。スポーツ科学を専門にされている先生でさえ、まだ知られていないような世界なのです。これがパラリンピックといわれる領域の中の悲しい事実でもあります。1人でも多くの人たちにパラリンピックについて理解をしてもらうことで、障害のある人たちの見方が変わるのではないかと思います。

パラリンピックということば

ちなみに、このパラリンピックという言葉があります。パラとオリンピックを合わせたものです。では、パラとはどういう意味ですかと言われると、先生方、どういふふうにお答えされるでしょうか。

もともとはパラプレジアという言葉です。パラプレジアというと、「対まひ」です。つまり、対まひというのは下半身がまひしている状態です。上半身は元気なのです。こういう状態を対まひといい、対まひのことをパラプレジアといいます。なので、パラリンピックというと、いわゆる対まひの人のオリンピック、スポーツ大会なのです。しかし、先ほどのビデオには、切断の方も視覚障害の方もいました。おかしいではないかとなります。実は初期の頃のパラリンピックは、対まひの人たちしか対象にしていなかったのです。これもまた、こ

のパラプレジアというか、パラリンピックという言葉からみえる歴史の一つですね。

その後、障害の種々が入ってきたので、名前も変えましようとなりました。そのときにパラという言葉のパラレルという意味にすることになりました。いろいろな本の中で、パラリンピックのパラは英語のparallelのparaから来ているというような理解がされています。僕も初期の頃はそうように本に書いたのです。

IPCの見解は、英語のパラレルではなく、ギリシャ語のパラを使ってパラリンピックだと言っています。

これはIPCの正式文書の中にも書かれています。その文章を見て、直したほうがいいとある方から指摘されたのですが、もう発行されているので直しようがないので、直してないのです。ですが、意味は実はbeside and around sideと書いてある通り、どちらかというパラレルに近いのは事実です。ただし、並行的なことではなくて、むしろ傍らにとか、一緒にという意味があるのです。ここが実はパラを考えると、きにとっても重要になってきます。

パラリンピックのパラ、これは今言っていたように、傍らに、何々と一緒にという意味です。では、何と一緒に、何々の傍らにと考えたときに、実は、IPC (International Paralympic Committee) はIOC (International Olympic Committee) の存在をとて意識しています。このオリンピックを常に意識しながらパラリンピックが動いてきた、歴史的に展開されてきたというのがあるのです。

そういう意味でも、皮肉もなく、このパラという言葉をあえてこちらにしたというのは、ある意味、すごい発想だったなと思います。

パラリンピックの歴史

もともとパラリンピックを開始したのは、グッドマン博士 (ルードウィッヒ・グットマン卿: Sir Ludwig Guttmann) です。グッドマン博士は、1940年代、ドイツで活躍した整形外科医です。その当時、脊椎損傷の人、対まひになった人たちに対するリハビリで、非常に大きな成果を上げていました。

1940年代、ナチスドイツ政権で、ユダヤ人に対する差別や迫害がありました。このグッドマン博士は、ユダヤ人だったのですが、処罰には至らず、1940年代前半から、ユダヤ人しか診療ができない病院に移されていたようです。

後々のことも考えて、ドイツを飛び出しイギリスに亡命しました。すでに対まひの治療に関して有名であったこともあり、うちの病院に来てほしいということで、ストーク・マンデビル病院に招かれたようです。

イギリスの病院では当時、いわゆる傷痍軍人の人たち、戦争から戻ってきた人たちを何とかして社会の中で復帰させられないかということを考えていました。その中で脊椎損傷は、今では考えられないのですが、当時は脊椎損傷の状態になると3カ月もたたないうちに亡くなってしまう人たちが大勢いました。脊椎損傷によって患部に血が回らないため、組織がくさり亡くなっていたのです。

それに対して、グッドマン博士はスポーツや運動を使って治療を行って、延命できるようにしました。余命3カ月と言われた人たちの寿命をかなり長く延ばすことができたということです。

そして、彼は、パラリンピックの原型、もしくは障害者スポーツの最も原型ともいわれていることを行いました。ロープを両手でもって手の力だけで天井にむかってのぼらせたり、ベッドの上で、重たいメディシンボールでキャッチボールをしていました。ボクシングもしていました。

先ほど対まひと言いましたけれども、足は動きません。しかし、手は動いています。つまり動ける所を動かしているのです。実はこれまでの脊椎損傷の方は足が動かない状態なので、ベッドで過ごしていることが多く、全体的に全身の血の巡りがあまり良くなかった。そういう血の巡りが良くないことによって、栄養が十分に患部に行かなくて、結果的に組織をくさらせていたのではないのでしょうか。それを彼は、元気なところをもっと動かさばよいと考えたのです。

元気なところをしっかりと動かすことによって、健康的な血、栄養素の高い血が全身に回って、患部にもしっかりとしたい栄養が届くようになるということで、結果的に脊椎損傷の人たちが余命を永らえたのと同時に、彼はこう言ったのですね。彼らの命を延ばすことが私の目的ではない。彼らが社会の中で復帰することが大きな目的なのだ。

実際に彼がここで運動治療に取り組むことによって、入院していた人たちが退院し、社会復帰した人が多くいました。

そういう取り組みが、なぜ、パラリンピックの元になるのかというと、博士は障害のある部分に着目するの

ではなく、障害のない部分、それを生かすことに取り組んだ。これは障害者スポーツの基の考えになっている「できないところではなく、できるところを見る。」という、障害者スポーツの原点なのです。

さらに彼は、これを機にストーク・マンデビル病院の中庭で競技大会を行いました。その競技大会は7月29日に開催されました。なんの種目を行ったのでしょうか。

アーチェリーなのです。実はアーチェリーは、足が不自由でもオリンピックに出られるのです。今でも同じです。つまり、上体さえしっかりとアーチェリーの弓を引ければ大会に出られるのです。それはグッドマン博士が狙っていたことだと思っています。

つまり、彼らの命を永らえることが博士の目的ではない。社会復帰が目的だったのです。その社会復帰の象徴はどこか。スポーツをするところと言うと、オリンピックなのです。オリンピックに出られるということは、それは一般の人たちと同じことであろうという、そういう彼の狙いが、実はあったのではないかと思います。もちろん、通常のオリンピックで使うアーチェリー以外に、非常に弱い力で弓が引けるものもあります。

博士は社会への復帰ということを考えていた。彼らの元気なところをうまく活用していけば、障害のある人たちはいろいろと活躍できるはずなんだ、彼らは活躍のできる存在なんだというふうに、博士は信じてやまなかったのだと思います。

その証拠に1948年7月29日はなんの日かという、当時のロンドンオリンピック大会開会式の日です。これには諸説あって、たまたまその日だったという説も残っていますが、僕はグッドマン博士に、生きていたら聞きたいです。なぜ、この日にしたのかと。多分、オリンピックは意識していたのではないかと思います。1人でも多くの障害のある人たちにスポーツ大会に出てほしい、オリンピック大会に出てほしい。そういう意味では、きっかけをつくってほしい、そんな思いがあったのではないかと思います。

ちなみに、オリンピックで金メダルを取って、パラリンピックでも金メダルを取った人がいるのですが、その人の種目もアーチェリーです。その人以外いません。アーチェリーというのは、われわれにとっては非常にシンボリックなスポーツだと思います。

実際に、1回目の競技会はアーチェリーだけを行っています。1948年大会のアーチェリーは、16人の選手

で行いました。ストーク・マンデビル病院で入院・治療・リハビリをしていた選手と、グループホームで生活していた人たちと、ストーク・マンデビル病院の中庭で試合をしたそうです。そうしたら、ストーク・マンデビル病院チームが負けたという記録が残っています。

その後、種目はどんどん増えています。1948年から1959年まで大会のなかで例えば、ネットボールというも行われるようになりましたが、途中で行われなくなっています。ネットボールとバスケットボールはほぼ同じような種目なので、変わって車いすバスケットボールになっています。

それ以外にも、やり投げやスヌーカー。スヌーカーというのはビリヤードみたいなものですね。見てみると共通するのは、まひがあってもできる、下半身が不自由な状態でもできるものが多いことです。そういう種目をやり続けました。

そして、1960年はローマで行いました。1959年まではストーク・マンデビル病院の中で行っていたのですが、初めてイギリス以外で行ったのが1960年大会です。その後、1989年だったか、IPCができたときに、1960年大会を第1回のパラリンピック大会に認定することになりました。そのため当時は第1回パラリンピック大会という名前ではなく、国際ストーク・マンデビル競技大会という名前でした。

その大会が1960年に行われました。1960年のパラリンピック大会というのは、オリンピックがローマで行われたので、その後にやりましょうということで、ローマで行ったのです。ただ、ローマのパラリンピック大会は、オリンピックと同じ都市で行ったのですが、ローマのオリンピック大会とは違う会場です。



第2回は1964年の東京大会です。東京大会では非常にいろいろな画期的なことをしてくれました。まず、ポスターを見てください。障害者スポーツのシンボリックなものとしてアーチェリーがあって、そのアーチェリーがポスターのど真ん中にありました。それから、車いすの人たちだけです。いわゆる対まひの人たちの大会ということになっています。当時のパラリンピックというのはパラプレジアの大会となっています。

そして、ポスターにもパラリンピックと書いてあります。その後に、国際身体障害者スポーツ大会と書いてあります。これもまさに当時の名称がそのまま使われているということです。ただ、このパラリンピックというのを公式な場に使ったのは、第2回のこの東京大会が初めてと言われています。

東京大会が素晴らしかったのは大きく二つのことがあります。この東京大会を誘致して、大会組織委員会は、いろいろな障害のある人たちも一緒に参加できるような大会にしたいと思っていたのです。

そこで、イギリスの本国に、ぜひ、いろいろな障害のある人たちが出られる大会にしたいから、そのような形で参加資格を広げてほしいと書簡を出しました。そうしたら、けんもほろろのようで、国際身体障害者スポーツ競技大会の規則にのっとって大会を運営してくださいという、通知が戻ってきたのです。そこで、くじけなかったのが東京大会のすごいところです。

それならと、2部構成を提案しました。1部は、国際身体障害者スポーツ大会を開き、2部は国内大会という形で、いろいろな障害のある人たちが大会を行ったのです。日本の場合は、1部と2部を合わせてパラリンピックにしようと言っています。国際的には1部のみを指しますが、日本はこういうふうにして、いろいろな障害のある人たちも一緒に大会をしようとなったのですね。

当然、車いす以外の人、切断の人、視覚障害の人たち、聴覚障害の人、いろいろな障害のある人たちが入って大会が行われました。

さらに画期的だったのは、日本は非常にコンパクトな大会をしました。先ほどローマの大会では、オリンピックの会場を使っていません。資料を見ると、ローマの大会のときには選手村と会場の距離がすごく離れていました。そして、車いすの人たちなのに、2階に上がらなければいけないような選手村

だったといいます。日本は非常にコンパクトな大会をしたのです。

場所は現在の代々木公園周辺ですが、そこは、当時オリンピックの選手村でした。そのオリンピックの選手村をそのままパラリンピックの選手たちにも解放しました。さらにこのエリアの中で、ほぼ全てのスポーツができるようにしたのです。

なぜかといえば、車いすの人に優しくということです。車いすの人たちが移動しやすいようにということで、大体、この中で大会が行われるようにできていました。ただし、水泳だけでできなかったのです。水泳だけはリフト付きのバスに乗って、移動して、少し離れた所の水泳競技場に行きました。

その理由は、当時、選手村近くにあった水泳競技場は水温調整ができなかったのです。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、脊椎損傷の方の中には、自分の体温を調整することが難しい方がいます。そのため、水の設定温度を変えられないと大変なことになってしまいます。そういうことで、水温調整ができる会場にするために水泳の競技場だけは別にした。これも障害のある人たちに合わせて行ったということなのです。こういう意味でも、障害のある人たちに合わせて、いろいろな会場設定等を行ったということも、東京大会の素晴らしかったところです。

パラリンピックの開会式の会場は、東京大会のオリンピックの開会式とは別の所です。なぜ違うかというと、オリンピックで使った会場は階段が多過ぎて、車いすの人が移動できなかったのも理由のひとつだと考えられています。そのため、車いすの人が、移動ができるよう、織田フィールドという場所で開会式を行いました。

織田フィールドというのは、全体的にフラットな状態です。そういうフラットな状態で車いすの人たちがみんな、大会に参加できるようにと設定しました。これもある意味、思いやりといわれる部分だと僕は思っています。

車いすバスケットは、外で試合をしていましたが中でもしています。それだけ会場が足りないような状況でした。当時、車いすバスケットは人気のあるスポーツだったという理由もありますが、日本は最下位でした。当時は勝てなかったです。

そして、面白いのは、卓球の会場なのですけれども、スポーツセンターのロビーです。選手村の近くにある

大きな会場で、なおかつ車いすの人が移動して使いやすい場所を探したらこういう所だったのかもしれませんが。当時は、車いすの人に対応している競技場はあまりなかったという中で、何とかして車いすの人たちにも心地よくスポーツをしてもらおうということで、こういう場所を選びながら大会を行ったということも、すごくいい大会だったのではないかなと思います。

このように、1960年ローマのオリンピックのときには、開会式の会場は違うけれども同じ都市でパラリンピックを行いました。1964年第2回は、東京オリンピックの後に東京パラリンピックを行いました。そのときには開会式の会場も一緒でした。これを契機にして、オリンピックの開催都市でパラリンピックが開催されたかという点、正解はバツです。

やはり、なかなかそうはいかなかったというのです。1968年には、オリンピックはメキシコで、パラリンピックはイスラエルで行われています。その後、ドイツ大会では、オリンピックはミュンヘン、パラリンピックは別の都市で行っています。というふうに、実はずっと違う都市でやっているのですね。同じ国でも違う都市でやっているのです。

オリンピックのロサンゼルス、アメリカ大会のときはもっとひどくて、パラリンピックをニューヨークで開催する予定だったのですが、ニューヨーク市が、お金がなくなったというので、ぎりぎりになって開催できなくなり、ストーク・マンデビルで行ったという記録が残っています。

そうした中で車いすのアスリート以外の選手も登場するようになりました。1976年は、オリンピックはモントリオール、パラリンピックはトロントです。トロントの大会の前、第4回の大会までは車いすの人たちだけの大会でした。それを1976年のときに視覚障害の人と切断の人が加わりました。その後、いろいろな障害種が入ってきたのです。

ところで現在のパラリンピック大会において、聴覚障害についてはクラスを設けていません。これは、非常に重要なポイントです。聴覚障害の人たちを排除したというわけではないのです。もともとはパラリンピックに関連する組織委員会のグループの中に、聴覚障害のグループが含まれていました。

しかし聴覚障害の人たちが、自らの意思でそこから出ますと言ったのです。なぜ、出ると言ったかというと、運営方針の違いです。当時パラリンピック大会は

主に健常の人たちが大会の運営を行っていました。

そうした中で聴覚障害の人たちは、自分たちの大会を、聴覚障害者の世界大会を開催していました。そして、その大会を含めて、運営はほとんど聴覚障害の人たちが行っています。つまり、障害のある人たちが、障害のある大会を自分たちのために運営するということから、方針が違うということで抜けました。

障害者スポーツの国際大会で最も古い大会というのは、1924年、パリで行われた障害者スポーツ大会といわれています。その大会の名前は当時、サイレントゲームというふうにいわれていました。サイレントゲーム、つまり、聴覚障害の人たちの大会です。聴覚障害の人たちの大会が最も古い大会なのです。

そして、その大会は今現在も続いていて、デフリンピックという名前になっています。デフリンピックというのは必ずしもまだまだ有名ではないのですが、最も歴史のある障害者スポーツ大会でもあります。こうした大会がある中で、なぜ、聴覚障害の人たちが入ってこないのだろうかということについては、まだまだ議論もあります。

もう一方で、パラリンピックは常にオリンピックを意識しています。グッドマン博士もそうだったと思いますけれども、オリンピックの大会の開催に合わせて、パラリンピックの元、ストーク・マンデビル競技大会を行ったというのがありますけれども、パラリンピックはオリンピックと常に関連を持っています。

その一方で、オリンピックのほうはパラリンピックに対して文句も言ってきたのですね。どういう文句を言ってきたかという、旗の色がよく似ているから旗の色を変えてや、オリンピックという言葉を使わないでというふうに、そんなこともずっとあったのです。それを少し変えていこう、もう少しお互いに協力していこうという雰囲気が出てきました。

そのような大会の雰囲気が出てきたのは、ニューヨークの大会が終わった後です。あまりにもパラリンピックに対する知名度が低い。人が入らない。そして、選手たちは、もっと競技としてのスポーツをしたいと主張したのです。これまでの大会というのはリハビリの延長、リハビリとしてスポーツを楽しむというようなレベルのスポーツをやってきたというふうな表現です。

そうではない、選手たちはもっと競技をしたい。オ

リンピックと同じように競技をしたいのと言いだした。これは、オランダでのアーネム会議において、選手たちが自らの意思で組織委員会に発言したのです。それを聞いて組織委員会がIOCに協力してほしいと申し出たのかもしれませんが。

そこで初めて協力ができて、その後、1988年、ソウルで、同じ都市で、またオリンピックとパラリンピックを開催することができたのです。このときにはオリンピック側からも、協力していきましょうというふうになって、1989年にはIPCという、パラリンピック組織委員会ができました。そして、2001年にIPCとIOCが合意を結んで、オリンピックの大会の後にパラリンピックも開催するルールを決めました。それ以降、オリンピックを誘致するときには、必ずパラリンピックも開催できることとなりました。

そうしてオリンピックとパラリンピックが同時に行われる中で、パラリンピックは人気がない、見に行く人が少ない。その中で選手たちは、一生懸命頑張って、もっと競技を高めていく。その中で、北京大会からプロモーションビデオも作り始めました。それを見て、ロンドンも、大会が終わった後ですけども、ビデオを作りました。そういうふうにして、どんどんプロモーションを図ってきたのです。

その中でロンドンの大会、大変な盛り上がりをしたのです。これはパラリンピックの歴史の中で最も成功した大会といわれています。280万枚近い数のチケットが売れました。

大体、パラリンピックの大会とか障害者スポーツの大会に行くと、当日行っても入れます。昔僕は、中国でシッティングバレーの世界予選大会があって、学生と一緒に行きました。大会の会場に近づいてきて、学生が「先生、チケット買ったのですか」と言うので、「任しとけ」と言って、実際に入りのほうに行くと、無料でお金を払わずに入れるのです。お金が取れないのですね、本当に取れない状況です。日本の大会の中でも唯一、お金を取って大会が行われているのはブラインドサッカーです。

ブラインドサッカーは昨年度、世界大会のS席だけ初めてお金を取りました。最初はかなり協会もびくびくしていました。本当に売れるのかと。でも、おかげさまで売れました。そういう意味ではビジネス的にも成功している例が増えてきました。

パラリンピックの成功とは

ロンドンのパラリンピックのときには完売状態です。それぐらいすごかった。当日行って入れないので。僕はロンドンのパラは行ってないのですけど、僕の同僚の先生が行きました。同僚の先生も、当然、パラリンピックは入れるからというので、チケットを予約せずに行ったのです。普通に行って、大丈夫って、他の教員も連れて行っていたのですけども、そうしたら、どこに行ってもチケットが手に入らない。予約でいっぱいですというので、結局、開会式、どこの席も取れなかったという。

本当に満席です。なぜこんなに人が入ったの、何に興味を持ってこんなに入ったのという世界なのです。これは一言で言うと、障害のない人たちが障害者スポーツに興味をもってくれたのです。どのように興味をもってくれたかという、チャンネル4の影響が大きいのではないかとされています。チャンネル4というのはテレビ局ですね。

チャンネル4はいろいろな方法を使って、障害者スポーツの促進を図っています。その促進の図り方というのは大体、3パターンあります。一つはいわゆる障害者スポーツの紹介です。こういうルールになっていますよ、こういう魅力がありますよというような、障害者スポーツの紹介です。それから、選手の紹介です。こういう選手がいて、こんなにすごい活躍しているのですよと。そして、もう一つはスポーツコーナーで障害者スポーツの結果を報告します。その3パターンをチャンネル4はずっと、やり続けてきました。そのことによって、どうも障害のない人たちが随分興味を持ってくれたのではないかとされています。

残念ながらきちんとしたデータがないのですが、会場に来て外に出てきた人たちに、先ほどの同僚の先生が話を聞いています。なぜパラリンピックを観に来たのかと。そうしたら、三つか四つくらいのパターンがあるのですけれども、そのうち、二つだけ言うと、一つは、地元開催だからという理由で来る人が多い。もう一つは障害者スポーツに興味があるからという理由です。この二つが多かったです。当然、地元開催だからというのは歓迎ですけども、もう一方で、やはり障害者スポーツに関心があるからというふうに観てほしい、来てほしいですね。その先生はいろいろと聞くと、障害者スポーツに関心があるという人たちがとても多かったと言っていました。

しかし、すべてのパラリンピック大会がそうではないと思います。僕は平昌の大会に行ってきた、平昌の組織委員会にも許可をもらって、公式に競技会に来ている人たちにインタビューをしました。インタビューをして、どのような回答が多いかといったら、圧倒的に地元開催が多いのです。だから、ちょっと見に来たのですよという感じなのです。感想も聞くと、こんなにいい大会なんだから、もっといろいろな人に来てもらいたいと言うのです。ですが、それまでに良かったのかというと、実は知らなかったという人が多いのです。

平昌に関しては、僕は1年半前からずっと、日本から行ったり来たりして、3カ月に1回ぐらい調査に入っています。平昌では、1年半前になっても全くプロモーションも何も起こっていない。1年前になったときに組織委員会の方に、ロンドンでこういうことがあったから、もう少しプロモーションビデオを流したほうがいいのではないかというような話をしました。それが通ったか通らないかは分からないのですが、その次調査に来たときにソウルの駅にプロモーションビデオが流れるようになりました。

全国障害者スポーツ大会の会場に来ている人たちにインタビューしましたが、全く同じ回答をするのですね。地元開催だからという。

つまり障害者スポーツの大会があって、その障害者スポーツを見に来ているのではないです。地元で開催して、みんな歓迎したいから、応援したいからというふうに来ているというのが現状なのです。

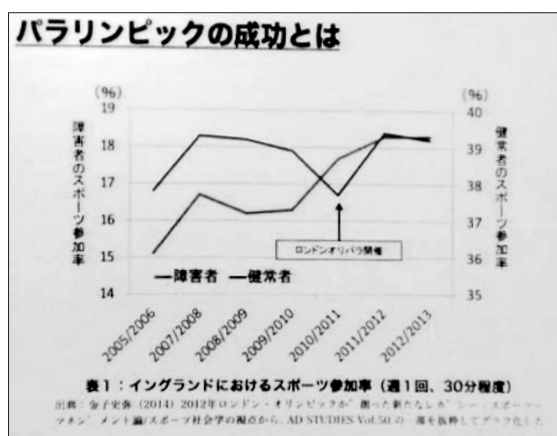
しかし、先ほど述べたようにロンドンに関してはそうではなかったという。このときに公式にインタビューのデータが欲しかったと思います。東京は、それに近いことになるのではないかなと、今は期待しています。

もう一つ、重要なことは障害のない人たちが障害者スポーツを理解してくれるというだけでは駄目なのです。重要なことは、障害のある人たちがもっとスポーツを楽しんでもらうことなのです。でなければ、このパラリンピックのムーブメントというのは成功したとは言えないのです。

ロンドンに関して、週に1回程度、30分ぐらいのスポーツをしている人の参加率をみると、健常者は40から37パーセントなので、平均的にスポーツに参加しています。ちょっと落ち幅があるのは気にしないでほし

いのですけれども。

障害者に関して見ると、右肩上がりです。これもある意味、成功した一つの見方として見ていいのではないかと指摘されています。先ほど言ったように、これも浮き沈みもありますし、実際に数字も15から19パーセントの間なので、そんなに増えているわけではないのですけれども、右肩上がりになっている。つまり、障害のある人たちがロンドンのパラリンピックを通して、随分とスポーツに関わってくれるようになったのだというふうに思います。



そう考えるとパラリンピックの成功というのは、一つは障害のない人たちが障害者スポーツを理解すること、そして、もう一つは障害のある人がスポーツをすること、それがうまく循環することによってインクルーシブ社会が出来上がってくるのだという考えです。これが実はIPCが求めている最終目標なのです。

パラスポーツを通した障害のある人のインクルーシブ社会を創造すること。これがパラリンピックムーブメントに求められています。パラリンピックを開催するということは、これを機にして、障害のある人たちが障害のない人と一緒に一つの社会の中で生活してほしい。そして、その中で分け隔てなくスポーツと一緒に楽しんでもらいたい。日常生活の中で一緒に生活してほしい、楽しんでもほしいとIPCも願っています。そういう意味では障害のある人たちにもスポーツ楽しんでもらいたいし、周りの人たちの障害者スポーツに対する理解もどんどん進んでほしいという、こういうことが期待されているのだと考えていただけたらと思います。

先ほど言ったように、パラリンピックを通して障害のある人たちが町に出てきてほしいというねらいがあ

りました。1964年のパラリンピック大会の記録写真をみると、海外のパラリンピアンが、大会が終わって、その日の試合が終わってシャワーを浴びて、選手村で閉じこもってなくて、外に出て、銀座に行って買い物をしているのです。タクシーに乗り付けて、車いすです。当時は、車いすの人が町に出ることもなかったわけです。これを、日本の選手たちがこういうことはあるのかという目で見ていた。ほとんどの海外のパラリンピアンは、車いすの生活をしています。にもかかわらず、みんな、職を持っていたのです。つまり、自立している人たちが多かった。日本の当時の障害のある人たちはどうだったかというと、ベッドにいるか、施設にいるかです。パラリンピックが終わった後、海外のパラリンピアンを見て、日本のパラリンピアンは、僕は病院を出ますと。僕ら、施設を出ます、一般就労します。どこかに仕事はないかと探し出したのです。そうした手記は幾つか出ています。

パラリンピックが開催されることによって、ベッドの上から町に出るようになったのですね、障害のある人たちが。これもある意味、パラリンピックによる成果であるとも言われています。

そういう意味で、パラリンピックが果たしてきた役割があるのです。だけど先ほど、実はオリンピックとの関係、お互いに手を取り合いましょうと言いました。もう一つ、重要なことがあるのです。なぜ、オリンピックとパラリンピックは、同じ時期に同じように行われるのか。もう一つはなぜ、一緒にやらないのかという疑問もあります。それはすでに議論され、討論されています。やはり一緒にしたほうがいいのではないかと、というのと、別々のほうがいいのではないかと、いろいろな議論があるのです。

僕はどちらかというと、あまり一緒にする必要はないだろうなと思っています。パラリンピックにはパラリンピックムーブメントがあります。オリンピックにはオリンピックムーブメントがあるのです。オリンピックにはオリンピックの価値があり、パラリンピックにはパラリンピックの価値があり、それぞれ理念が違います。理念が違うので、できれば、別々に大会ができないかとも言っています。だけれども、一つの大会に二つの理念があってもいいのではないかとこの考え方もあるのです。

パラリンピックには、courage、determination、inspiration、equalityという四つの価値がありま

す。オリンピックには、respect、friendship、そして、excellenceという三つの価値があります。excellenceに関しては、人類最強の卓越した力を見せつけるということがexcellenceの世界です。

それ以外にも友情であるとか、お互いに敬意を示すとかということも、当然、オリンピックの大事な概念であり、respectに関しては特にオリンピックに求められている、スポーツをする人間みんなに求められている概念です。つまり、この三つというのはスポーツをする上での価値なのです。そういう意味ではパラリンピックでも同じことが言えます。つまり、パラリンピックの中にはオリンピックの価値が点在しているのですね。



その一方で、パラリンピック独自の価値もあります。それは何かと言えば、障害があるということを含めて勇気を持って大会に参加することです。そして、自分の限界を決めないということ。そして、より多くの障害のある人たちも含めて、スポーツすることを鼓舞すること。そして、スポーツをする姿を見せることによって、障害のあるなしに関係なくスポーツは平等であるということを示す。

こういうふうにスポーツを通した価値、スポーツに内在する価値、パラリンピックはオリンピックの価値も包含した形で、スポーツ展開がされているのだと考え、オリンピックとパラリンピックは共に動いていることがとても重要になってくるのだと思います。オリンピック、パラリンピックを見るときの一つの見方として、ぜひ、こうした見方をしてもらえるとうれしいなと思います。

先ほど障害者スポーツの話をしました、日本にはパラリンピックだけではなく、その意思を受け継いだ全国障害者スポーツ大会があります。先ほど言ったように、ベッドの上にいる障害のある人たちが町に出る

ようになった。当時は身体障害者という言い方をしていましたけれども、身体障害者の人たちの自立を促すことに成功した。なおかつ、国民の障害者理解を促すことができたという、その二つの面から、1964年の東京のパラリンピック大会はとても成功しました。

その成功をぜひ、つなげてほしいということで、日本国内の全国障害者スポーツ大会が行われました。日本の全国障害者スポーツ大会は、東京パラリンピックの2部構成の2部の内容がほとんどです。つまり、車いすの大会ではなく、車イス以外の身体障害者を含めた大会です。

あらためて言うと、障害のある人の社会参加というのがあって、そして、社会の障害理解という、両方がパラリンピックからの意義として展開されたわけですね。その一方で、そうした大会に意義があるにもかかわらず、障害のある人が社会参加をするということ、そして、社会の障害者理解を促すという、そういう意義があるにもかかわらず、障害者スポーツ大会をテーマにした、クリティカルなスタディーというのはほとんどありません。

先ほども紹介しましたが、障害者のスポーツ参加が増えた、スポーツ参加率が大会前後で高くなったというようなデータもあります。その一方で、そんなことはないというデータもあります。スポーツ参加への動機は得られず、その割合は77パーセントだった。むしろそっちのほうが多数で、スポーツ参加する人たちがそんなにいなかったという結果もありますし、大会後、スポーツへの参加率は増加していないと、スポーツイギリスという、日本のスポーツ庁みたいなところが報告しているデータもあります。

場所や調査の仕方とか、それから、スポーツの実施率というのは、例えば、週1回やるのと週3回やるのではその割合って違ってきますから、その取り方によっても違うのです。そういう意味でもいろいろと賛否両論があるというのが現状です。

また、社会の障害理解はどうなっているかというと、これもロンドンのパラリンピックなのですが、障害者をポジティブに捉えている人の割合が、調査対象者の8割であったというデータと、81パーセントの障害者が自分たちに対する態度は改善したと思っていないというデータもあります。そういうふうに、良かったよという人もいれば、良くなってないよという人もいます。こういうのも、ある意味、僕はすごく健全な

データかなと思っています。何が良かったのか、何が悪かったのかということを検討するためにも、こういう賛否両論があるというのはとてもいいことだなと思っています。

しかし、先ほど言ったように、日本の障害者スポーツ大会に対するそうした研究がほとんどないというのが現状です。そこで、僕は、日本の障害者スポーツ大会に対して、実際に参加率が上がったのかを調査しました（調査1）。それ以外にも、一般のスポーツ施設を利用している障害の人たちが増えたか調査しました（調査2）。あとは、公共の施設利用、とある大型ショッピングセンターにおいて、障害のある人たちが大会の前後で増えたのか、増えていないのか、そういう調査も行っています（調査3）。障害の理解に関しても共感的な態度を調べたり、障害のある人がスポーツをすることに対する認識などをアンケート調査したり（調査5）しています。

パラリンピック大会は障害者の社会進出に影響を与えるのか

201X年に開催された、全国障害者スポーツ大会の開催地にある障害者スポーツ関連施設です。その中にある体育館の利用者数がどう変わったのかというのを調査しました。

実際にその地域に行って説明をし、許可を得て、体育館利用者数を閲覧させてもらい、データを得ました。それをグラフ化した後に、なぜこうなったのかというのを、関係者の人たちからいろいろと聞き取りをしました。

そういう聞き取りをしたデータも含めてまとめたものが次のスライドです。大会開催は201X年です。毎年、4月、5月、6月の第1四半期のデータだけをグラフに表しています。大会は10月に行われているので、直前が3950人の障害のある人が体育館を利用しています。

その大会の開催が終わった後に、同じ体育館の利用者は3473人と減っています。僕が予想していたとおりだったのです。やはり大会が終わったら利用者は減るではないか。これでは、障害者スポーツを行っても、障害のある人たちはスポーツを日常化していないという見方ができるので、ある意味、批判的な数字として捉えることができます。



しかし、3年前までの利用者のデータをみると、3年前では3396人、そして、2年前は4307人で、次に3799人で、3950人。上がったりがったりします。なぜこうなのだろうと、いろいろと調べてみました。

まず、大会1年前の利用者が減った理由は、改修工事が行われたからです。つまり、物理的な状況です。物理的に使えなくなったので減っているのです。こういう障害者スポーツ開催をする予算が付きません。県の予算や国の予算です。もっと前段階からお金をくれればいいのか、ぎりぎりしてくれるのですね。一昨年に、東京都の障害者スポーツセンターも改修をしましたが、それでも早いほうです。

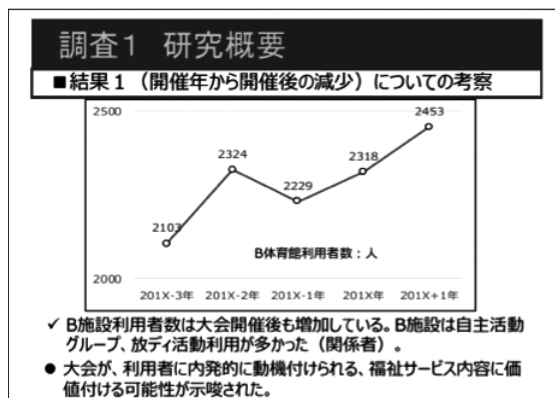
この時期、体育館自体は改修工事が入っている中で、利用者は少ないのですが、少ない割には結構、来ています。同時に、施設側としてみれば、地域の公民館であるとか、体育館とか別の所を使って、事業を展開していたということもあります。なので、数字的にはもう少し上の数字になります。

では、大会2年前の201X-2年です。ここはなぜ、増えたのか。これも障害者スポーツ大会の特長でもあるのですが、大体、6年前から10年前に実施計画をします。実施計画を立てた後に予算が来ます。予算が来てようやくお金を使って、啓発活動をします。地域によっては、それこそ、障害のある人たちも大会があることを知らないし、自分たちが選手として出るなどと考えていない人たちもいます。それを、あなた、行けるから大会に出ませんかという促しを、10年前や6年前から初めるのです。

この地域は6年前から実施計画ができて、5年前から予算が出ました。施設の担当者によると、6年前の実施計画の時点で、お金のかからない事業はやり続けたそうです。いわゆる啓発活動、障害者スポーツ大

会の開催を口コミで予算を使わないで行い、予算が出てから、いろいろとイベントを開催しました。そのイベントの開催がようやく軌道に乗ったのが大体、この頃だそうです。ようやく軌道に乗って、体育館にどんどんいろいろな人が来るようになったという状況です。

では、大会後の201X+1年です。なぜここは減ったのか。実はもう一つ、同じ県内の別のB施設でも同じようにデータ取ったのです。予算の出方、実施計画は一緒に同じ県なので、B施設もA施設と同じように、201X-3年から201X-2年かけて利用者数は上がってきている。A施設もB施設も事業の軌道化は同じなので、同じように予算がうまくいったんだろうなという数字です。B施設も改修しているのですが、201X-1年に利用者数が下がっているのですが、あとは上がっています。けれども、A施設は思いきり下がっています。



なぜ、A施設では大会開催後に利用者数が下がったか。もう一つ、初級スポーツ教室に関するデータがあります。初級スポーツ教室というのは初めてスポーツをする人用の教室です。その教室の参加人数を見ると、大会の1年前までは確実に増えています。けれども、大会開催の年にはもう減っています。

つまり、ほとんどの人たちがこの大会に向けて、大会に、試合に出場するという理由から、この体育館を利用している、大会に出ることが動機づけになっているのです。A施設の関係者から聞いているのですけれども、A施設に参加しているほとんどのクラブチームは競技系のクラブでした。そして、この大会に向かって、日々練習を増やしていました。

大会が終わるまでは、仕事をちょっとセーブしながら練習をしていたため、大会が終わった後は仕事のほうにシフトをかけて、練習する日が少なくなったのではないかと聞いています。つまり、A施設に来ている

競技者、競技チームの人たちは、ほとんどが大会を目指してやってきた。

そこで、先ほどのB施設のデータが出てくるのですね。B施設のデータでは、大会後に利用者数が上がっています。なぜ上がっているのかをB施設の関係者にいろいろと聞いてみました。B施設は、競技チームではなく、自主活動グループの人たちが多く参加するようになりました。なので、大会に出ることを目指しているのではなく、自分たちでスポーツを楽しみたいという人たちも登録されていて、どんどん利用者が増えていったと。

さらにもう一つ、特徴的なのが放課後デイサービス事業です。ご存じかもしれませんが、厚生労働省が障害のある学齢期の児童に対して、療育および居場所づくりという形で進めている、放課後の時間にいろいろな事業主が行っているような福祉サービスです。そのサービスの中で、これまであまりスポーツや運動を取り上げてこなかったところ、全国障害者スポーツ大会があり、それを機にして、放課後デイサービスのプログラムの中にスポーツを取り入れるところが増えていきました。

それはプログラムとして面白くて、大会が終わった後も継続してそのスポーツを取り入れてプログラムを行っているということで、利用者数が大会後も増えている。つまり、両施設での利用者数の大きな違いというのは、利用目的が違ったということなのです。

別の言い方をすると、放課後デイサービス事業が、スポーツや運動はサービスとして使えるのではないかと、それで活用してくれたという意味では、大会が一つのきっかけになったのだらうなと思います。

こうしたことを考えると、何が影響しているのかといったときに、大会があることによって、障害のある人たちが日常的にスポーツに親しむ人が増えることは事実です。ですが、それは大会を目指しているような人たちであれば、大会が終わった後には終わってしまいます。ですが、大会をきっかけにしてスポーツの価値を感じてくれる人たち、または日常的にスポーツを楽しむということに価値を見いだしてくれるような人たちがいると、もしかしたら、大会後にも施設利用が起こるのかなと思います。

最初是这样いふに、大会競技だけに注目して、結局、大会が終わった後は、障害者スポーツは低下すると思っていたのですが、意外な結果が出ました。

パラリンピック大会は社会の障害者理解を促すのか

そして、もう一方で、障害者スポーツ大会は社会にインパクトを与えるのかというところで、障害のある人のスポーツ、障害のある人がスポーツすることへの認識が高まるのかというデータも取っています。全国障害者スポーツ大会が開催された、A県に在学中の中学校2年生を対象に調査を行いました。

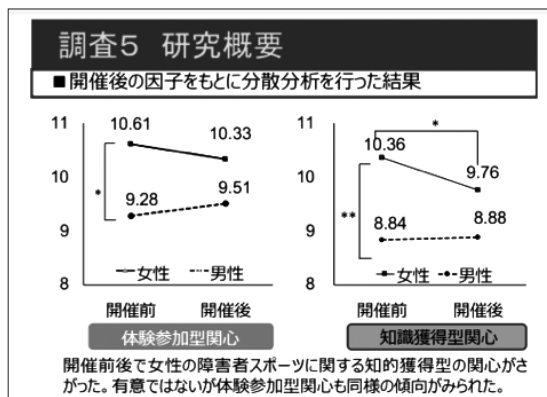
その中で、障害者スポーツに関する情報を得たいとか、障害者スポーツを実際に見に行きたいとかという10項目に対して、アンケート調査を行いました。大会開催前と大会開催後にデータを取り、それぞれに因子分析をかけてみました。

面白かったのは、大会開催前の因子分析では、ほとんど10項目のうち8項目が1因子に固まって、1項目だけ別に出てきている。それが大会開催後になると、大きく二つに分かれたのです。

つまり、漠然とした興味関心から、「活動そのものに参加してみたい」という興味関心と「知識を得たい」という興味関心とに分かれるようになった。すなわち、大会を開催することによって、興味関心の質が、漠然としたものから変わったのではないかと思います。これは大会をすることによって得た一つの変化ではないかと思っています。

スライドの通り、大会開催前と大会開催後で、男女別に、体験参加型関心と知識獲得型関心に分けてみました。そうすると、大会開催前に体験に参加したいと思っていた人は、女性と男性の差が開いています。つまり、男性は女性に比べると有意に低く、女性のほうが障害者スポーツを体験してみたいと思っています。

それが大会開催後になると、男女間の有意な差はなくなりました。有意差がなくなった原因は、おそらく、大会に参加したいという関心が、男性が上がったというよりは女性が下がったのです。大会を開催する前は、いろいろな障害者のスポーツを体験してみたいと思っていたけれども、開催後は別にという感じですね。やり尽くしたのというのであれば、男性も下がるはずですがそうではありません。障害者スポーツ体験プログラムのようなものは、この県では実施してなかったのです。



知識獲得型は、開催前後で男性はあまり変わらないですね。女性は開催後に下がっています。開催前は知識も得たかったけれども、開催後になると下がってしまいます。一体これはなぜなのか。先ほど述べたように、障害者スポーツについて何か特別なプログラムをしているわけではないのです。これは理由があるのではないかということで、別の調査をしました。

それは障害のある人に対する共感的態度です。障害のある人に対する共感的態度というのは、データとして女性の方が福祉型といわれています。それはいろいろなデータ、ジェンダーの問題もあるのですが、いろいろと指摘されているところです。

つまり本研究において、女性は男性に比べて弱者に対する向社会的行動が高いことは以前からも知られていて、中学生においても同様であることが確かめられました。大会実施前後を通して比較すると、障害者への援助意図性が統計的に有意に低くなりますが、それは特にアクセシビリティが整っている状況であればあるほど、女子は援助意図性が下がるわけですね。

なぜ下がるかというと、明確には言えないのですが、まず、もともと共感的態度が高かった女性たちが障害者スポーツを見て何を思ったのかなのです。おそらくですが、女性は、障害者スポーツのスポーツという側面がだんだん理解できたと思っています。もっと言うと、もともと障害に対する共感的態度がある方、福祉的な姿勢であるとか気持ちを持ってらっしゃる方です。そうした気持ちを持ってらっしゃる方が、障害者スポーツのスポーツという側面に目を向けていくことによって、障害のある人も、結構スポーツをしているじゃないとなるのです。そのため意図的援助の傾向が下がっていったのではないかという一つの見方ができ

ます。それはあくまでまだ仮説の段階なのですから、どうもそういう説明の仕方は考えてもいいのではないかなと思っています。

これをジェンダーという枠組みを取って、障害者の福祉的な側面への関心の高い人、障害者スポーツのスポーツという側面が高い人というグループで分けられることができるように、次の調査では取り組んでいます。そうすることによって、この数字の表れ方がよりはっきりとするのではないかなと思っています。

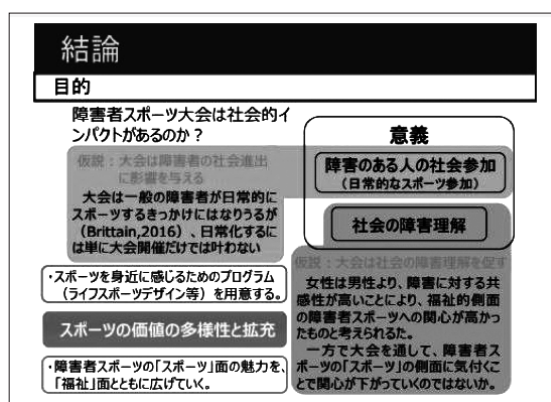
つまり、障害者スポーツの福祉という側面に関心を持っている人は、障害者スポーツの最初のイメージというのはどうしても障害という部分に来るので、福祉的なところに気持ちが向いていて、それに障害者スポーツのスポーツという側面に関心を持つことによって、福祉的な関心が割的に弱まっていくのではないかなというのが、今のわれわれの仮説の部分です。それについてはまだまだ議論の余地があるので、今後も見ていきたいと思っています。

そして、最後にお伝えしたいのはまずは、障害者スポーツ大会の社会的インパクトがあるのかということで、大会は一般の障害者が日常的にスポーツするきっかけにはなり得るが、日常化するには単に大会開催だけではかなわない。先ほど言っていたように、スポーツを身近に感じるためのプログラムというのを用意しなければいけないのではないかとわれわれは考えていて、きっかけとして大会がある。

そのきっかけを通して、日常的にスポーツを感じるためのライフ・スポーツデザインだとか、スポーツの価値の多様性というところもありますが、これは、障害者スポーツの、スポーツの面の魅力を、福祉面と共に広げていくという作業をしていかなければいけないのではないかなと思っています。

もう一方で、社会の障害理解というところで言うと、ここは、女性とは書いてありますけれども、障害に対する共感性が高いことにより、福祉的側面の障害者スポーツへの関心が高まったと考えられる。一方で、大会を通して障害者スポーツのスポーツという側面に気付くようになっていくのではないかな。従って、障害者スポーツの持っているスポーツの面を、魅力を感じてもらふことによって、障害のある人の福祉的な側面に関心を持っている人たちも、スポーツという側面にも関心を持ってもらえるように、われわれがもっと働き掛ける必要があるのではないかなと思ったのです。

最後になりますが、パラリンピックを支える、スポーツという面を支える意味で、オリンピックはとても意味を持っています。ですが、研究グループの1人が調査をしたのですけれども、いわゆるエンパワメントと表現してはみたけれども、パラリンピックを観て日常的に頑張ってみようと思うよりも、オリンピックを観たほうが自分も頑張ろうと思う障害のある人たちがいるというのも事実なのですね。



パラリンピックだけが障害のある人たちのエンパワメントを高めるというわけではなくて、オリンピックも障害のある人たちのエンパワメントを高めるというデータが出てきた。これはとても重要なデータなので、オリンピックを盛り上げていただくということは、ある意味、障害のある人たちがスポーツを楽しむ、障害のある人たちが日常的に頑張っていけるというような状況にもつながっていくのかなと思っています。今後、こうした研究がどんどん進んでいけばいいなと思っています。

自分自身は、先ほど言ったように、ど真ん中は療育的な内容ではあるのですが、引き続き、この研究に関しては継続していきたいと思っています。なので、ぜひ、いろいろな忌憚のないご意見、ご感想をいただきながら、自分自身を高めていきたいと思ひます。

また、こうした研究に関心のある先生がいらっしやれば、ぜひ、一緒に研究をさせてもらえたらなというふうに思っております。ありがとうございました。